

裏切られた
黒猫は
幸せな魔法具
ライフを目指す

①



シオン

精霊に愛される魔力を持った愛子。天使のように優しい美青年だが、中身は真っ黒な腹黒。クルミが必死になっている姿を見て楽しんでいる根っからのいじめっ子気質。

クルミ

魔女だった記憶を持つ不幸体質の女子高生。地球から前世の世界に転移してくる。自分が初代女王として建国した、ヤダカインの現状を気にかけている。

登場人物紹介



リディア

時と空間の精霊で、十二の最高位精霊の一人。
穏やかな性格だが、好奇心旺盛なところもある。
クルミとは前世の頃からの知り合い。

ナズナ

クルミが作った使い魔。
関西弁で話す陽気な性格のぼっちゃりオカメインコ。
クルミに頼んで作ってもらった魔法具を着けている。

アスター

シオンの護衛。彼の幼馴染でもあり、心許せる数少ない相手。
世話好きで、クルミからは「オカン」呼ばわりされている苦勞人。

リラ

十二の最高位精霊の花の精霊。
恥づかしがり屋で、人目を避けるためすぐ土に埋まろうとする。

裏切られた黒猫は
幸せな魔法具ライフを目指したい

1

Contents

プロローグ	006
第1話 ここではない世界	012
第2話 森の中で	025
第3話 帰ってきた世界	037
第4話 村での生活	046
第5話 精霊魔法と魔術	060
第6話 時の精霊リディア	073
第7話 使い魔	088
第8話 魔法具で村の改革	101
第9話 裏切り	110
第10話 町へ	133
第11話 クルミの魔法具店	145
第12話 愛し子	162
第13話 皇帝陛下	171
第14話 黒猫は皇帝の手のひらの上	181
第15話 脱走からの捕獲	196
第16話 リラ	212
第17話 脱出成功からの	224
第18話 魔王降臨	237
第19話 皇帝の黒猫	250
エピローグ	260
番外編 皇帝の初恋	267
番外編 幼馴染の憂い	277

プロローグ



とある夜の真つ暗な部屋の中。

あるのは手元にある小さな蠟燭ろうそくの火だけ。

その小さな灯りあかだけを頼りに、彼女……クルミは黙々と作業していた。

今日こそはことを成し遂げんとするその目はギラギラと輝いていた。

この日のために徹夜で準備もした。

きつといけるはずだと、自分自身に言い聞かせる。

ベッドにはそこで寝ているかのようにクッションを詰め、拝借はいしゃくしたシーツを縦にいくつも裂い

て端と端を結び、一本のロープのようにした。

準備は万全ばんぜん。

クルミは蠟燭の火を消し、隙間すきまなく閉められたカーテンからそつと外を覗くと、いるわいるわ。

クルミを監視する悪魔達あくまが。

実際は神のごとく崇めあがられる存在なのだろうが、自分の行く手を邪魔じやまする奴らは悪魔同然。

それ以上にたちの悪い魔王もいるが、今頃奴は宮殿内で行われているパーティーに出席しゅっせきして
忙しい。

ならば後は目の前の悪魔達をなんとかするだけ。

そのための対策は考えてある。

時計を見ていて、その時間が迫っていることを確認する。

カチカチと秒針が進む度に心臓の鼓動が強くなるのを感じる。

「三、二、一……」

その瞬間、ドーンと空に大輪の花が咲いた。

『わー、スゴーい』

『なにになに?』

『花火だー』

『見にいこー』

予想通り、花火に気を取られた悪魔達が一斉に向かっていく。

いなくなったのを確認したクルミは、ニヤリと笑って窓を開け、テラスの手すりに先程作ったロープをくくり付ける。

周りに奴らがいなことを再確認して、クルミは慎重にロープを下りていった。

地面に足をつけると、ほっと一息吐く。

そして、次の瞬間には走り出した。

時々巡回する兵士をやり過ぎし、クルミは一目散に走り抜け、宮殿の裏庭まで来た。

庭と言っても、それは森と言って問題ない広大な広さがあり、たくさんの木々に覆われている。

ここまで来れば、この暗闇だ。兵士に見つかかることもないだろう。

クルミは、暗視あんしの魔法を使っているので暗闇でも問題ない。

悪魔達も今なお上がっている花火に気を取られて、クルミが部屋にいないことにも気付いていないはず。

この森を抜けさえすれば、後はクルミが事前に見つけていた抜け道を通って外に出られる。すると……。

「ふははは、やったわ。やっとあの魔王を出し抜いてやったわよ！」

そう高笑いしたところで、何故なぜか急に右足が重くなった。

嫌な予感が出て恐る恐る右足を見ると、じっとこちらを見る悪魔が一人。

「ぎゃー！」

思わずクルミは叫んだ。

「いつの間につ」

『駄目だめなのー』

「私のことはほっといて」

そんなやり取りをしていると、右足にくつついている悪魔から情報が回ったのか、他の悪魔達も駆け付ける。

幼児のような姿をした小人だが、その可愛い姿かわいに騙だまされてはいけない。奴らは恐ろしい存在なのだ。

『あつ、いたよー』

『逃げてるー』

『捕まえろー』

『おー』

そうして、ピタンピタンとクルミに張り付いてきた悪魔達により身動きがとれなくなる。

「は〜な〜せ〜」

『だめー』

「駄目じゃない。今日こそ私は自由になるんだ」

『シオンが怒るよ〜』

「そうならないために逃げるのよ！」

体にたくさんの悪魔達を張り付けたまま、それでも諦めあきらの悪いクルミは一步また一步と歩みを進める。

と、そんな時……。

「まったく、クルミはまた逃げたのかい？」

ドキンつと、クルミの心臓が跳はねる。

それは聞きたくなかった人の声。

顔を引ひき攣つらせながら後ろを振り向くと、クルミが絶対に会いたくなかった悪魔達の親玉、魔王がにっこり微笑ほほえんでいた。

「わあああ、離してええ」

最後の悪足掻きをするクルミをひよいと持ち上げた魔王……もとい、クルミが逃げたくて仕方ない相手のシオンだ。

「離して〜！」

「まったくいちいち迎えに来る僕の苦勞を考えてよ」

「迎えに来いなんて言っていないでしょうが！ いったいどうしているのよ。パーティーは？」

「今回は色々とお細工したみたいだけど、僕には意味なかったね」

「むかつく！ その残念な子を見る目で見んなあ」

目を吊り上げて怒りに怒りまくるクルミと、見た目は天使のような笑みを浮かべたシオンは対照的だった。

「いい加減諦めたらしいのに。精霊達の目をかいくぐれるわけないのにさ」

「諦めるわけじゃないでしょう！ たとえこの悪魔達がいようと」

「悪魔なんて可哀想に。可愛い精霊じゃないか」

「私には悪魔にしか見えない……」

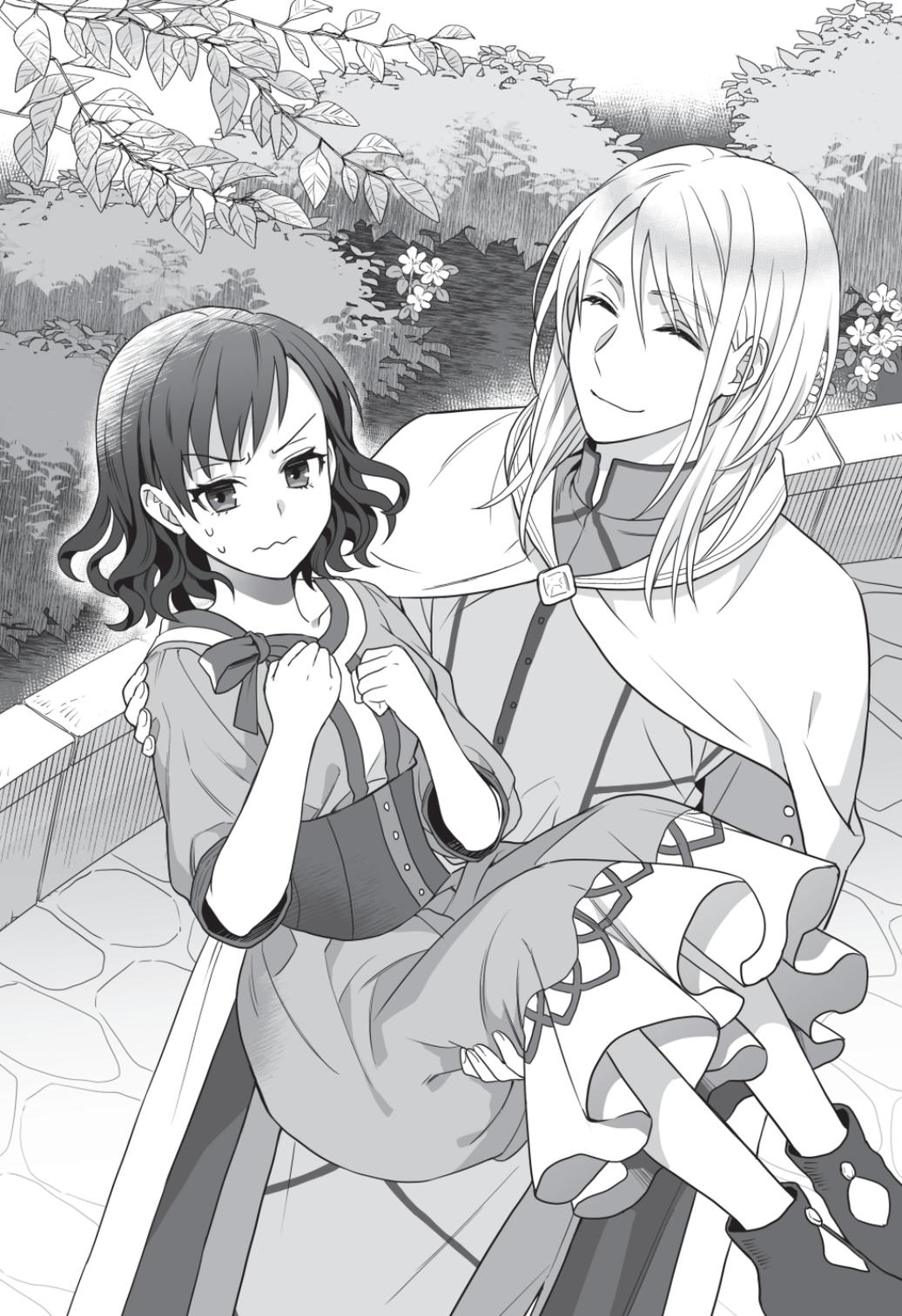
毎度毎度追いかけていたらそう思うのは仕方がなかった。

そんなクルミにシオンはやれやれというように溜息を吐く。

「何が不満なのかなあ」

「私は外で自由に生きたいのよー！」

「ダメ。クルミは僕のなんだから」



「あんたのものになった覚えはない」

「僕のだよ。クルミを拾ったのは僕なんだから」

「ああ、なんでこんなことになったの？　ここまで不幸か私の人生。神様のアホー！」

「はいはい、おうちに帰ろうね」

こうして、クルミが宮殿に連れてこられてから通算二十六回目の逃亡劇は幕を下ろした。魔王に捕獲されながらクルミは思うのだ。どうしてこんなことになってしまったのかと……。

第一話　ここではない世界



元々は日本の高校に通っていたクルミ。

黒目黒髪の日本人らしい平凡な容姿で、ごくごく普通の女子高生だった。

箸はしが転んでもおかしいお年頃だ。

だが、今のクルミはとても笑えない状況にあった。

付き合って一年になる彼氏の浮気が発覚したのである。

「許すまじ。あいつらぶち殺す」

人ひとり殺しそうな危ない目つきで、お弁当の肉団子に箸はしを突き刺した。

そんなクルミの正面に座っていた友人のなっちゃんことなつめ棗なつめは、必死でなだめる。

「まあまあ、落ち着いて」

「なっちゃん、これが落ち着いていられると思ってるの!? よりによって相手は春菜なのよ!」
春菜というのはクルミの友人の一人だった。

女の子らしい守ってあげたくなるような可愛らしい容姿に、人懐っこい性格。

だが、以前からあまりよくない噂があった。友人の彼氏を奪うというよろしくない噂が。それ故に彼女には、女友達と言えるのはクルミぐらいしかいなかっただろう。

周りの子達にも付き合いを止めた方がいいよと言われたりしたが、クルミは噂なんかで人を決めるのはよくないと、春菜との付き合いは止めなかった。

そしたらどうだ。見事に彼氏を奪われた。

確かにちょっと男子に対しても距離が近いなどは思っていたのだ。クルミという彼女がいる彼氏に対してもボディタッチが多かった。

デートだというのに付いてきたり、彼氏と二人でいると、どこからともなく現れては話に加わったり。

思い返せば色々引つ掛かることはあった。

「あの女、最初っから奪うつもりだったのよ。それにこのこ付いていく方もいく方だけだね」

二人揃って手を繋いで仲良く別れを告げに来た時は、地面に埋めてやるうかと本気で思った。

その場で彼氏への想いは冷め、春菜には絶縁を叩き付けてやったが、クルミの腹の虫はおさまらない。

「まあ、春菜って可愛いもんね。あんな子に迫られたら落ちちゃうか」

「なっちゃんはどっちの味方なの!？」

ダンっと机を叩くと、慌あわてたように棗がフォローを始める。

「もちろんクルミだよ。浮気は駄目だよ、うん。全面的にあの二人が悪い」

「でしよう!？」

「うんうん」

「絶対に奴らは許さない」

「は、犯罪だけは起こさないでね……」

そう棗が思わず忠告してしまうほどには危険な目つきをしていた。

「そう思うなら、今日の帰りにパンケーキ食べに行くの付き合って。こうなったらヤケ食いよ!」

「あつ、ゴメン。今日は彼氏とデートなの」

即断られてクルミは涙がちよよぎれそうだ。

「なっちゃんああん! あなたは傷心の友人と彼氏、どっちが大事なのおお!？」

「えっと……彼氏」

クルミは、ガクッと崩れ落ちた。

少し考える間があっただけかもしれない。即答されるよりは。

棗はつい最近彼氏と付き合い始めたところで、今が一番ラブラブな時なのだ。

今日とて本当は彼氏と昼ご飯だったのを、泣きついて無理やり付き合わせたようなものだった。

仕方ないと諦めたクルミは、授業が終わると一人カラオケで熱唱し、パンケーキ三段重ねをヤケ食いました。

最後にバッティングセンターで思いつ切り打ちまくり、ちよつと怒りが昇華しょうかされたような気がした。

もう、後は奴らの不幸を神に願うしかない。

まったくどうしてこんなことになってしまったのか。

周りの忠告を聞いて、春菜と縁を切っておけば違った今があったのだろうかと考えてしまう。

思えばクルミの短い人生は不幸の連続だった。

はつきり言って、クルミの生まれた家庭環境からして悪かった。

幼い頃から両親は喧嘩けんかの毎日。

罵詈雑言ばりぞごんの声がクルミの子守歌代わりだった。

さらに両親のダブル不倫も発覚。

どうやらお互いに探偵を雇って調べたらしい。

その辺りの詳しいことを何故知っているかというのも、クルミがいても所構わず言い合いをする両親の言葉から分かったことだ。

そして、互いに相手がいながらどうして離婚しないのかというと、クルミが原因だった。

どっちが親権を取るか。それが離婚できない一番の要因だった。

どちらもクルミの親権を欲しがっての争いなら幸せなことだったが、残念ながら二人ともクルミ

を引き取ることを嫌がったのだ。

「お前が母親なんだから、お前が引き取れよ！」

「母親だからってどうして引き取らなきゃ駄目なのよ。私は嫌よ、あんな気味の悪い子」

「俺だっっているかっ」

なんてことを、平然とクルミに聞こえるのも構わず言うのだから、両親は親としてはクズかもしれない。

どうしてこんな家に生まれてきてしまったのかと、クルミは両親の喧嘩を目にする度に思うのだ。だが、少し自分も悪かったなと思うことがクルミにはあった。

それは……クルミにはここではない別の世界の記憶があることがそもそも始まりだ。

いわゆる前世の記憶というやつなのだが、そこでクルミは魔女と言われていた。

ちなみに男性でも呪術じゆじゆつを使える者は魔女と言われていた。女性が圧倒的に多かったので一緒にされたのだろう。クルミの前世は女性だったが。

そこでは魔法があり、精霊がいて、獣人じゆうじんと言われる人間以外の種族がいた。

クルミはその前世では呪術の研究をしており、研究により生み出した、記憶を次の生に引き継ぐ呪術を行使した。成功するかどうか分からない術だったが、クルミは無事に記憶を引き継いだ。

だが、生きてきたあの世界ではなく、魔法の存在しない地球で生まれ変わったのは想定外だった。こんな話をしたら病院に連れて行かれるか、精神病院に行けと言われるかもしれないが、確かに

あの世界は存在したのだ。

それを証明するように、この地球にも精霊は存在している。

あっちのおじさんの頭にも、車の上にも、電線に乗る雀すずめの隣にも。精霊はありとあらゆる場所にいる。

だが、その存在を視認しにんできる者はこの地球にはいなかった。

いや、もしかしたらこの地球のどこかにはいるのかもしれないが、あいにくとクルミは会ったことがない。

そんな普通の人には見えない精霊をクルミは見ることができた。

あちらの世界では特に珍しい存在ではなかった精霊。

むしろ、あちらの人々は精霊に力を借りて魔法を行使していたぐらい誰もが知る存在だった。けれど、こちらでは魔法も精霊も普通は見ることのできない空想の存在。

クルミはまだ前世の記憶が戻りきらない幼い頃、よく精霊のことを口にしていた。

記憶が戻っていないので、精霊という存在のことも、それが普通の人間には見えないもので、見えることの方がおかしいのだということも分からず、両親に疑問をぶつけていた。

「あれは何？」

「あの小さな羽の生えた子達はなんていうの？」

無知だからこそその疑問だった。

もし、その時すでに記憶が戻っていたらそんなことは聞かなかつたららう。

人は分からないことを恐れる。

皆と違ふことに拒否反応を見せる。

結果、両親はクルミを気味の悪い子として認識した。

クルミが前世の記憶を完全に取り戻し、精霊は普通の人間には見えないことを理解した頃には遅かった。

どうにか取り繕ったつもりでしたが、両親はクルミを完全に奇異な存在とした。

自分の子供と認めるのも嫌悪するほどにクルミを嫌がったのだ。

辛い虐待をするような人達ではなかったが、我が子への愛情はごっそりなくなってしまったやうだ。

まあ、仕方がないかと、達観していられたのは前世の記憶のおかげだ。

前世でも魔女は異端者扱いされていた。

よくよく思い返せばその頃から不幸続きだった気がする。

前世でも亡くなったのは早かった。

そう、今のクルミと同じ年齢ぐらいまでしか生きられなかったのだ。

しかも、その死因が殺人という残酷さ。相手は姉のように慕っていた弟子だった。

前世では異端者扱いされた上に信頼していた者に殺され、今世では家族愛にも恵まれなかった上に、彼氏を寝取られ……。

そんなことがあったクルミは軽く人間不信だ。

自分は神様に何か嫌われるようなことをしただろうか、生まれ変わったクルミは何度思ったこ

とか。

それでも、元々の性格が凶^{ずがと}太いクルミは、多少ひねくれたものの元気に育った。

両親に対しても多少悪いと思っっているのだ。念願の子供がこんな異世界人だなんて思わないだろう。せめてもっと早くに記憶が戻っていたら子供らしく振る舞うこともできただろうに。

しかし、クルミとて別の世界に生まれるとは思わなかったのだから仕方ない。

前世で親交のあった精霊から、基本的に魂はその世界で循環^{じゆんかん}する^{と聞かされていた}。だから、当然生まれるのも同じ世界だと思っっていたのだ。

まさか魂がこちらに転移するとは思っっていなかった。

だが、まあ、一応友人もいるし、こっちはこっちで楽しく過ごしている。

……けれど、時々思い出す。

あの世界の風景を。

そんなことを考えていると、記憶から抹消^{まつしょう}したい奴らが前から歩いてきた。

向こうもクルミに気付いたようで、男の方は顔を強張^{こわば}らせている。

そんな反応をするなら、浮気などせず^{しつかり}と別れてから付き合えば良かったのだ。

別れた後ならクルミとて文句は言えなかった。

「あつ……クルミ」

気まずそうに視線を彷徨^{さまよ}わせている目の前の男は、クルミの元彼。

そして、そんな元彼の腕にべったりとしがみ付いているのは、その彼氏を奪った元友人の春菜だ。

「あー、クルミちゃんだ。クルミちゃんも寄り道？」

気安く話し掛けてきた春菜に、クルミの目が据すわる。

よくもまあ、彼氏を奪さらっておきながら笑顔で挨拶あいさつができたものだと感心する。無視をしてその場を通り過ぎようとしたが……。

「ゴメンね、やっぱり怒こってるよね？」

しゅんとしおらしく落ち込む春菜に対し、クルミのこめかみに青筋が浮かぶ。

いけしやあしやあとよく言えたものである。

その瞬間、戦いのゴングが鳴った。

「怒こってないとも思ったの？ そうだとしたら随分ずいぶんとおめでたい頭あたまをしてるわね。さすが友人から男を寝取れる女おんなだわ」

「おい、そんな言い方ないだろう？」

元彼の方が何か吠ほえていたが、ギロリと睨にらみ付けると視線をそらした。

度胸どくちゆうもないくせに口を挟はさむべきではない。

「彼を怒こらないで、悪いのは私わたしなのっ」

庇かばっているつもりかしらないが、クルミの目をさらに冷たくさせるだけだ。

「当たり前でしょう。そんなの最初はじめっから分かっていることじゃない。友達の彼氏と知しっているながら言い寄る女おんなが悪いのは古今東西ここんどきどこでも同じよ。だけど、それに惑まどわされて落ちる男おとこも大馬鹿ばかでしようが」

「そんな、言い寄るだなんて……。ただ好きになっちゃっただけなの。それはそんなに悪いことなの？」

「普通は友達の彼氏と違ってたら手は出さないんじゃないの？ お互いに。たとえ好きになったとしてもちゃんと関係を清算してから付き合おうのが礼儀でしょ」

二人の顔を交互に見ながら語尾を強くする。

何故か春菜の方が目をウルウルさせて泣きそうにしているのが痾しゃくに障さわる。

被害者はこっちだろうに。

「悲劇のヒロインぶるの止めてくれる？ 加害者はあんた達の方なんだから」

「そんなこと言わないで。酷ひどいことしたのは分かってる。でも私はまだクルミちゃんのこと友達と思ってるから応援してほしいの」

「はあ!？」

思わず心の底から、この女マジかと思つて声が出た。

「人の彼氏奪つておいて友達なんてよく言えたわね」

「奪つたわけじゃ……。好きになっちゃったの。好きすぎてこの気持ちを抑えられなかったの」

「春菜……」

何故か感動している元彼。

「クルミは、まだ俺を好きなんだよな。だからそんな厳しいこと言うんだろ？ けど、俺は春菜が好きなんだ。好きな俺の幸せを思うなら春菜をこれ以上傷付けるな。それは俺が許さない!」

「あつ、そう」

ドヤ顔する元彼に、あつさりした言葉を返す。

男としてキメたつもりなのだろうが、寒くて鳥肌が立ってきた。

なにやら二人して盛り上がっているようだが、クルミの心はこれ以上なく冷めている。というか目が覚めた。

この男を奪われてなにを未練^{みれん}たらしく怒りを覚えていたのか。

こんな簡単に浮気をする奴はきつとまたいつか浮気をする。

それか、春菜が次のターゲットを見つけるのが先か……。

どっちにしる、クルミの中で一生関わり合いになりたくない人間に落ちたのは確かだ。

むしろ、この男をもらってくれてありがとうと思おう。

そう考えたら、なんだか怒っていたのが馬鹿らしくなった。

「じゃあ、そういうことならお二人ともお幸せに〜」

「認めてくれるのか」

「嬉しい、クルミちゃんなら分かってくれらると思つた」

後ろで二人が何か言っていたが、右から左に流れていった。

家に帰ると、真つ暗な誰もいない部屋。

いつも通りの我が家だ。

「ただいま」

そんなことを言っても返ってくる言葉はない。

ここ最近(ゆつた)は滅多(めつた)に両親(りやうしん)の姿(すがた)を見ないし、帰(かえ)ってきたと思(おも)ったら喧嘩(けんか)している場面(ばめん)しか見ない。

一応(いちおう)お金(かね)は置いてく(お)けてくれるので、飢(う)えること(こと)はないのが(が)せめてもの救(すく)いだ。

だが、やはり家(いえ)に一人(ひとり)でいると時々(ときどき)無性(むしょう)に虚(むな)しくなる時(とき)がある。

自分はこんな所(ところ)で何(なに)をしてるのか(か)と。

そもそも前世(ぜんせい)の記憶(きおく)を残(のこ)すように術(まじ)を施(ほ)したのは、生前(せいかん)に研究(けんきゅう)していた魔法具(まほうぐ)に関する研究(けんきゅう)成果(けいこ)を来世(らいせい)に引き継(つ)ぎたいと思(おも)ったからだ。

だが、科学(かがく)が発達(はつたつ)し、電力(でんりき)をエネ(ene)ルギーとして成(な)り立(た)つこの世界(よ)で、魔力(まじり)で動(う)く魔法具(まほうぐ)の知識(ちしき)を持(も)っていたとしても宝(たから)の持(も)ち腐(くさ)れ。

前世(ぜんせい)では研究(けんきゅう)三昧(さんまい)の生活(せいかつ)だった。

それが楽しくて、唯一(ただひとつ)の趣味(しよみ)とい(い)ってよ(よ)かったが、この世界(よ)で魔法具(まほうぐ)の研究(けんきゅう)をするわけ(わけ)にもい(い)かない。

精霊(せいりやう)が見(み)えるのは魔力(まじり)がある証(しるし)拠(拠)。

だからクルミ(くるみ)は魔法(まほう)が使(つか)えるはず(はず)だけ(だけ)れど、科学(かがく)の発達(はつたつ)した世界(よ)で魔法(まほう)なんて使(つか)おうものなら、この世界(よ)でもクルミ(くるみ)の居場(ゐば)所(ところ)はな(な)くなくな(な)ってしま(しま)うと思(おも)うと怖(こ)くて使(つか)って(つか)ない。

この世界(よ)に娯楽(ごらく)はた(た)くさんある(ある)が、一番(いちばん)の楽(たの)しみだ(だ)った研究(けんきゅう)を取(と)り上(あ)げら(ら)れた今(いま)の生活(せいかつ)は幸(さい)せか(か)と言(い)われ(れ)ると首(か)を傾(か)けてしま(しま)う。

「帰(かえ)りたいな(な)……」

あの懐かしい世界に。

魔法のある不自由な世界に。

この世界は便利で楽しきもたくさんあるけれど、クルミの心を満たしてくれるものはこの世界にない。

もう前世で生きた年齢に達してしまっただが、自分がいるべき場所はここではないと叫ぶもう一人の自分が心にいる。

「帰りたい」

自分が自分らしくいられるあの世界に。

帰りたい……。

そう強く思ったその時。

カッと足下が光る。

「えっ、何!？」

動揺するクルミの体を光が包み込む。

目も開けられない光に飲まれ目を瞑ったクルミは、直後、めまいのようなものを感じて座り込む。

光が収まったのを感じて目をゆっくりと開けると、クルミは木々が生い茂る森の中に座り込んでいた。

「……はっ?」

クルミは意味が分からず、しばらくポカンとした顔で座り込んだままだった。

森の中で



しばらく呆然^{ぼうぜん}としていたクルミだったが、少しずつだがようやく頭が回り始めた。

先ほどまで玄関にいたはず。

けれど、今は木々に囲まれている。

夢か？

疲れて夢でも見ているのか？ と思ったが、手で触れる地面の草の感触は生々しい。

それに匂いだって森の草木の匂いがした。

夢と言うにはあまりにも現実的な感覚がありすぎる。

いったいこれはどうしたことか。

とりあえず立ち上がって足に付いた汚れを払う。

家の中に入る前で良かったかもしれない。

おかげでまだ靴^はを履^はいていたのは幸いだった。

すぐ側には靴^{かばん}も落ちていたので、それを拾って周囲を見渡す。

人っ子ひとりいない森の中。試しに靴に入っていたスマホを取り出して現在地を確認しようとし

てみるも圏外の文字。

がっくりと肩を落とし、スマホは制服の胸ポケットにしまう。

「ここはどこなのよおー！」

クルミの疑問に答えてくれる者は当然いない。

これからどうすべきか、必死で考える。

急に森の中に移動することなどあり得るのか。

最後の記憶はまばゆい光とめまいのような感覚。次の瞬間には森の中。

あまりに現実離れしていたが、クルミは普通の女子高生ではなかった。

地球ではない世界で生きた記憶を持つ魔女だった。

「……まさか、帰ってきた？」

確信があるわけではなかった。

けれど、前世で親交のあった精霊から、時々違う世界からやってくる者がいると聞いたことが

あったのだ。

地球の漫画やアニメならよくある異世界転移。

それが実在することを知っていた。

それが理由だというならこの状況も納得できるが、あいにくと判断材料がない。

異世界に転移したとして、自分が前世で生きていた世界なのか、はたまたまったく別の世界なの

か。

世界がいくつもあるのかとか、そういうことまで聞いていなかった前世の自分を責める。

何故もっと詳しく聞いておかなかったのかと。

前世で生きていた世界ならなんとかなる自信があるが、まったく別の世界となるとすごく困った事態になる。

「と、とりあえず森を出よう。人がいるところまで出ないとどうにもならないわ」

そう決めたものの、どっちへ行けばいいか分からない。

高い木に囲まれているから全部同じ景色だ。

遭難という嫌な言葉が頭に浮かぶ。

せめて目印さえあれば……。

特に高そうな木の前まで来ると、上を見上げる。

これを登れば少しは周りの風景が見えそうだ。

けれど問題なのは、これを登れるほどの力が普通の女子高生にあるとは思えないこと。

クルミは少し考えた末に、制服のスカートの下に、靴に入れていたジャージのズボンはを穿きは気合を入れた。

「いっちょやってみるか」

これまでいっさい使ってこなかった魔法。

ここには誰もいないので見られる心配をする必要もない。

生まれ変わって初めて、クルミは魔法を使ってみることにした。

目を瞑って体の中を巡る魔力を感じ取る。

そこに確かにある力を意識しながら手と足に移動させ、強化させる。

大きく一呼吸すると目を開け、足に力を入れてジャンプした。

ただひと只人なら決して跳べない高さを軽々と跳び、枝を掴み、さらに上へ上へと跳んでいく。

自身の魔力を対価に精霊の力を借りて行使される精霊魔法ではなく、自身の魔力のみを使って身体能力を強くする強化魔法だ。

己おのれの魔力を使った魔法は精霊魔法以上に魔力制御せいぎよが難しい。

しかし、前世ではクルミの得意とした魔法だった。

まあ、それもそうならざるを得ない理由があったからだが……。

息を吐くように自然に強化した体で、ひよいひよいと猿顔負けの速さで木の上まで登ったクルミは、辺りを見回す。

どこまでも続く緑色の景色。

「うーん、思った以上に大きい森だなあ」

町や村は見えない。

「せめて目印があれば……」

周囲をキョロキョロと見回していると、地球でも見慣れた精霊がふよふよと呑の気に目の前を飛んでいるのを見つけた。

クルミはこれ幸いと、迷わず精霊をわし掴みにした。

『ぎゃー、ひとさらいー』

「人聞きが悪い！ ちょっと聞きたいことがあるんだけど、ここは……」

『やだ』

質問が終わる前に拒否る精霊に、切羽詰まっているクルミは握り潰してやろうかと心の中で悪魔が囁いたが、そこは理性を総動員して押し止めた。

可愛い姿をしているが、精霊は怒らせると国ぐらい簡単に壊してしまうほどの力を持っているのだ。怒らせるのは得策ではない。

まあ、虫のように捕まえた時点でギリギリ怪しいのだが。

クルミはポケットからスマホを取り出し、ストラップにしていた猫の形のスクイーズを外して精霊に見せた。

「これと交換でどう？」

『なにこれー？』

「スクイーズって地球の玩具」

『わー、初めての触感』

精霊は何度も触っては感触を確かめている。

「面白いでしょ？」

『これくれるのー？』

「私の質問に答えてくれたらね」

『答えるー』

どうやら精霊のお気に召したようで、ほっとする。



「人がたくさん住んでる所に行きたいの。できるだけ近場で。どこか分かる？」

『えっとねー、あっちー』

精霊が指を差した方向を確認する。木がたくさんで分らないが、精霊は嘘をつかないので信用していいだろう。

「あともう一つ。ここは地球じゃないわよね？ この世界にいる最高位精霊は十二？ 時の精霊リディアはいる？」

突然そんなことを聞いたのは、クルミの前世では世界に精霊がおり、精霊には位があったからだ。下位、中位、上位、そして最高位。その最高位には十二の精霊しか存在しておらず、その最高位の精霊の中には時と空間を司る時の精霊というのがいた。その精霊の名をリディアと言った。

『うん、いるよー』

「……分かった、ありがとう。はい、これ」

『わーい』

精霊にお礼のスクイーズを渡すと喜んでどこかへ飛んでいった。

本当はもっと聞きたいことがあったが、これ以上質問攻めにして精霊の機嫌を損ねるのはよろしくないので諦めた。

「時の精霊リディアがいる、か……。ってことは、やっぱりここは前世の世界……」

時の精霊リディアとは、前世のクルミと面識があった精霊だった。

その精霊がいるということは、前世の世界である可能性が高い。

とりあえず、知らない世界でなかったことは僥倖きようこうだった。

けれど、クルミが生きていた時代からどれだけの時間が経たっているか分からない。

その辺りのことを先程の精霊に聞こうかと思つたが、精霊は寿命がないので時間の感覚が人とは大きく違うのだ。

精霊にとって一年も百年もたいして変わらない。聞いたところで正確な時を聞き出すのは難しいだろうと質問はしなかった。

「まずは人里を目指すか」

精霊の指差した方向へ向かうことにした。

けれど、普通に歩いてはいいつ辿たどり着くか分からない。

足だけを身体強化し、鞆たもとを持ってクルミは走り出した。

今が何時か分からなかったが、できるだけ日があるうちに人里に行きたかった。

夜になれば街灯もない森の中は真つ暗になり、身動きがとれなくなる。

この世界がクルミの知る世界なら、地球にはいなかった魔獣まじゅうといわれる凶暴な生き物がいるはず。

そんなのと夜に出会いたくはない。

幸い少しだが水と食料は鞆に入っていた。

家に帰る前にコンビニで夕食やお菓子やら色々と買いだめていたのだ。

あの時コンビニに寄つた自分を心から褒ほめたい。

けれど、何日分もあるわけではないので、早く食料を調達できなければこの森で行き倒れる。そうなる前に人のいる場所に辿り着かなければ。

魔力がどこまで保つか、今のクルミにはそれが心配だった。

「くう、精霊魔法が使えたらひとつ飛びするのに」

精霊魔法は魔力を対価として精霊に力を貸してもらおう魔法だ。

しかし、精霊は気まぐれな性格の上、好き嫌いが激しい。

魔力には質があり、精霊の気に入る魔力の質をしていれば精霊はたくさん力を貸してくれるが、嫌いな魔力の質をしていたら力を貸してはくれない。

クルミの魔力の質はあまり好みではないようで、十回使ったうち三回成功すればいい方だった。

風の精霊に力を借りられたとして、空を飛んでいる途中で『やっぱりやめた』などと言って魔法を止められてしまったら、クルミは真つ逆さまに落ちてしまうことになる。

なので、今精霊魔法を使うのはリスクが大きすぎた。

その点、身体強化は己の魔力を使って発動する魔法なので、魔力さえあれば使い続けられる。つまり、今もつとも信用できるのは己だけということだ。

時々枝や草に邪魔されながらも、オリンピック選手も真つ青の速さで森の中を疾走する。

「きつと地球で強化魔法を使ったらオリンピックで金メダルも夢じゃなかったのになあ」

まあ、クルミは目立つことが好きな性格ではなかったのでもそんなことはしなかったが、オリンピックにでも出ていたら両親からの目も少しは違っていたらどうかと不毛なことを考えた。

けれど、それも今さらだ。

本当にここが異世界ならば、地球に戻る術すべはない。

来ることができるとも戻ることもできるのではないかと思うが、地球からこちらへは来られても、こちらから地球へは行けないものらしい。

そう前世で精霊に教えてもらっていたクルミは戻れないことを理解していたが、特に悲しみは浮かんでこなかった。

むしろ、生まれて初めてかもしれないほど気分が高揚こうようしている。

自分が生きていた世界。

もう戻れないと諦めていた場所。

クルミとして地球で十八年生きてきたが、クルミにとっての故郷は前世での世界なのだ実感する。

なんだか抑圧おさされていた色々なものが解放されたような心の軽さを感じた。

けれど、喜んでばかりもいられない。

なにせ今のクルミは森で遭難中なのだから。

一心不乱に駆ける。

もうどれだけ経ったか分からないが、数時間は走り続けている。

そろそろ日も傾き始めていて、クルミに焦りあせが始める。

森の中で夜を明かすことも覚悟しなければならぬかと思つた頃、急に視界が開けた。

急ブレーキをかけたクルミは立ち止まって確認する。

「道だ」

そこは人が通る道のようになっていた。

クルミがこれまでいた場所のように舗装されてもない土だけの道だが、そこには誰かが通っただろう足跡と、車輪の跡のような轍わだちがあった。

ようやく見つけた人の痕跡こんせきに、クルミは少しほっとする。

この道を行けば、いずれは人のいる所へたどり着くだろう。

少し休憩しようと、道の脇に座って、鞆からお茶の入ったペットボトルとおやつのチョコレートを取り出す。

お茶をゴクゴクと飲んで一息吐き、チョコレートを口に放り込む。

「だいぶ来たと思うんだけどな……」

精霊に示してもらった方向へちゃんに進んでいたらの話だが、こうして人が通った跡があるということはそう遠くない所に町か村があるはず。

しかし、いかんせん地図アプリなんて便利なものは使えないので、後どれくらいで人のいる場所に着くか分からない。

「はあ、私が愛いとし子こぐらい精霊に好かれてたらこんな苦労しなかったのに……」

愛し子とは、特別精霊に好かれる体質の者のことを言う。

基本頼まれなければ力を貸さない、それも好みの魔力を持つ者限定という精霊が、頼まれずとも

手を貸してしまふほどに好意を持つ存在。それが愛し子だ。

愛し子のためなら精霊は我も我もと手を貸し、愛し子を害する者には徹底的な報復を行う。

愛し子が理由で滅んだ国さえあるぐらいだ。

あんまり好かれていないクルミとは正反対の存在だが、そんな特殊な存在はそもそも滅多に現れない。

けれど現れたら、たいていは国に取り込まれてしまう。

それは保護をするためだが、保護を名目に危険人物を隔離しようという権力者の思惑もあるのだから。

天然記念物よりも珍しい愛し子だが、クルミは前世で愛し子の知り合いがいた。

前世としても昔のことだ。

冗談を言い合って、喧嘩して、一緒になってふざけた。

ひだまりのように、その場を温かく照らす笑顔がクルミの脳裏を過った。

「さすがにあいつは生きてないかな……」

あれからどれだけの時が経ったのだろうか。

前世で残してきた国や人達はどうしているだろうか。

色々な思いがクルミの中を駆け巡る。

目を閉じれば数日前のことのように鮮明に思い出される記憶。

辛く、楽しく、そして悲しい記憶。

少し、ほんの少し記憶を引き継いだことを後悔しそうになった。
クルミは両手で頬ほほを叩き、気持ちを入れ替える。

「駄目だ駄目。疲れてるせいで余計なこと考えちゃう。早く人のいる所へ行こう」
そうして、重い腰を上げ、再び身体強化をしようとした時。

遠くからガラガラと音が聞こえてきた。

段々と近付いてきた音に、クルミは大きく反応する。

道の先を見ると、馬車がこちらへ向かってきていた。

クルミは表情を明るくし、「おーい」と馬車に向かって手を振った。

第3話 帰ってきた世界



「クルミちゃん、ビスケット食べる？」

「いただきます〜！」

「いい返事だね。さあ、お食べ」

そう言っておばあさんが差し出してくれたビスケットを手に取り、口の中に入れた。

サクリとしたビスケットは少し塩味が効いていて小腹が減っていたクルミにはとてつもなく美味おいしく感じられた。

先程通りかかった馬車に乗っていたのは、これから自分達の村へ帰る途中の老夫婦だった。

隣村からの帰りだったらしい。

老夫婦は、奇妙な格好をしたクルミを最初は警戒していたが、旅の途中に道に迷ってしまったというクルミの咄嗟の嘘を信じ、快く馬車に乗せてくれた優しい人達だ。

舗装のされていない道は悪く、振動がもろにお尻を直撃するが、文句を言ってなどいられない。むしろ感謝せねばならないだろう。

こんな人のいい夫婦に出会えたのは僥倖だった。

ついでに夫婦から情報を仕入れる。

「つかぬことをお聞きしますが、竜王国のことは知ってますか？」

「もちろん知ってるわよ。よほどの田舎でもない限り知らない人はいないもの。なんたって世界四大国の一つですから」

「四大国……」

クルミの前世では、まだできたてほやほやの国だった竜王国だが、大国と言われるほどになっていることに素直に驚く。

「それがどうかしたの？」

「いえ、ちなみになんですけど、竜王国が建国されてからどれくらい経ちますか？」

「そうねえ……竜王国の国民じゃないから詳しくは知らないけれど、ざっと数千年くらいじゃないかしら。ねえ、あなた？」

「そうだな。それぐらいじゃないか？ 靈王国に次いで二番目に古い国だからな」

妻に問われた旦那も少し考えながらそう答えた。

「すう、数千年ーっ!？」

思わず裏返った声が出るほどにクルミは驚いた。それほどに時間が経っていたことに。

前世のクルミが竜王国と言われる場所を訪れた時は、まだそこは国にすらなっていないかった。

最強の種族である竜族がテリトリーにしていた場所という、ただそれだけの地域だった。

それが、人間によって迫害されたり奴隷にされたたくさんの種族が竜族に救いを求めて集まり、

当時の竜族の族長を王として建国されたのが竜王国という国だ。

クルミの前世である魔女達もそんな竜族に救いを求めて集まった者達だった。

何故かクルミは、後の初代竜王となるヴァイトに気に入られ、建国の手伝いを色々させられた

のだが、今となってはいい思い出だ。

そもそも、当時でも大人とは言えない年齢だったのに、魔女としての才能が高かったために何か

と相談に乗らされた。

ヴァイトもヴァイトで、年齢や種族など気にしない大らかな性格だった。

大人の中に子供が交じっていることにおかしいとツッコむ者も多数いたのに、「大丈夫、大丈夫

夫」と笑って押し通したのだ。

クルミの知り合いだったという愛し子はこのヴァイトのことで、愛し子故に多少のことなら強引

に周りに認めさせる力があつたのだ。

そうして建国の重要な会議にも強制参加させられたが、クルミとしては魔法具の研究をしている方が好きだったので正直いい迷惑だった。

会議そっちのけで研究に没頭していたら強制連行されたものだ。

そのくせヴァイトはなにかと理由を付けて仕事をさぼっているのだから怒りが湧く。

何度叱りつけて仕事をさせたか分からない。

いつしかクルミがヴァイトのお目付役みたいな立場にさせられたのには、心から苦言を呈したかった。

愛し子であるヴァイトに対しても容赦のないクルミをヴァイトはなおさら重用したので、ヴァイトがなにかとクルミに相談してくる度に、周囲からの妬み嫉みは酷かったが、ヴァイトが守ってくれたりしていたので文句を言いながらも手伝っていた。

もしこれがヴァイトではなかったのなら、クルミは手伝わなかっただろう。

文句を言い、嫌々ながらも手を貸していたのは、ヴァイトにはそういう人を惹きつける力があつたからだ。

竜族だからとか力が強いからとかではない、ヴァイト自身が持つ魅力。

愛し子であること以上に強い力だ。

だからこそ、竜王国が建国されてヴァイトが忙しくなるとクルミを守る余裕もなくなり、ヴァイトから気にかげられるクルミに嫉妬した者達から酷い差別を受けるようになった。

それはクルミだけでなく、クルミと同じ魔女達にまで影響が及んだ。

仲間の魔女達には申し訳ないことをしたが、元々魔女を快く思っていない種族は多かった。

それまでは、ヴァイトの来る者拒まずの精神により抑えられていたが、ヴァイトが正式に王になると、魔女が国の要職に就くのではと危惧した者達からの反発が目に見えて表に始まってしまったのだ。

クルミはそんなつもりはなく、魔法具の研究ができればそれでよかったというのに、元々の魔女の印象が悪かったためにそうは思われなかった。

あまりにもヴァイトと仲が良すぎたので、ヴァイトの番いになって王妃になるのではと恐れられたというもある。

まったく見当違いの心配だというのに。

なにせヴァイトには好きな人がいたのだ。決して結ばれることのない不毛な片思いだったが……それを知っていたのはクルミだけだったので、周りが変に勘違いしたのでらう。

嫉妬や権力争い。それによる嫌味や牽制。それに居心地が悪くなったクルミは、魔女達を連れて竜王国から海を渡った島へ行き着き、そこでヤダカインという国を作った。

魔女のための、魔女が迫害されない、魔女が過ごしやすい国を。

いつの間にかクルミがヤダカインの初代女王になっていたのは、今思い返しても首を傾げるしかない。

クルミはただ平穩に研究ができる環境を作りたくて頑張っていただけなのに。

しかし、迫害や差別をされない安住の地は手に入れた。

時々ヴァイトが遊びに来て、恋バナを聞かされたのは本気でウザかったが、平穩だった。殺されるその時まで……。

話は逸れたが、竜王国の建国に関わったクルミが生きていた時から数千年もの時間が経っているなら、寿命が長い竜族と言えどさすがに生きていないだろう。

ヴァイトにまた会えるのではないかと少し期待していたのだが、無理そうだ。

ヴァイトなら、快くこの世界で生きていくための手助けをしてくれるのではないかという思惑もあつたため、方針を改めなければならない。

「クルミちゃん？」

「は、はい！」

考えにふけていたクルミは、おばあさんに名前を呼ばれていることに気付いて我に返る。

「どうかしたの？ 乗り物酔いでもした？」

「いえ、大丈夫です。ちょっと考え込んでいただけなので。竜王国のことは分かりましたけど、ヤダカインのことについては何か知っていますか？」

「ヤダカイン？ 聞いたことのない名前ねえ」

「俺も知らないなあ」

さすがにヤダカインのことまでは知らなかったようだ。

まあ、小さな島国なので仕方ないかとクルミは諦める。

しかし、竜王国辺りに行けば話も聞けるかもしれない。

そのためには、まず現在地を確認しなければならない。

「じゃあ、ここは竜王国から見て、どの辺りにありますか？」

「竜王国から？ 不思議なことを聞くのね。知っていてこの辺りを旅していたんじゃないの？」

「えっと……気の向くままに旅をしていたので」

内心冷や汗ものだった。異世界から来ましたと言って、どれだけの人が信じるか分からなかった。クルミとて、前世で精霊から聞かなければ異世界から人が来るなど知らなかったのだ。この老夫婦がそのことを知っているとは思えない。

旅人を装うのが一番無難に収まるだろう。

正直、旅人と言うには着ている服も装備もおかしすぎるが、騙されてくれたみたいだ。

「あら、そう？ えっと場所だったね。ここは竜王国から見て、だいたい北東にある四大大国の一つである帝国内の中心部辺りかしら」

「帝国？」

クルミには覚えのない国だった。

「そうそう、この辺りだよ」

おばあさんが積み荷から地図を出して見せてくれた。

「なるほど」

だいたい現在の位置は分かったが、クルミがこの世界で生きていた時には、この辺りは多くの国が滅んだり生まれたりを繰り返して争いの絶えない地域だった。

きつと数千年の間に国々が統合され一つの大きな国となったのだろう。

クルミは少し考えた末にもう一つ質問する。

「竜王国に行くにはどうしたらいいですか？」

ヴァイトはもういないだろうが、前世で関わりがあった国。今がどうなっているか気になった。

そして、できればヤダカインに赴き、今の様子を実際に自分の目で見たいと思った。

「そうだね。陸路を行くならぐるっと大回りしないといけないから、一度帝都に向かつて、そこから港町に行つて船に乗った方が早いかもしれないね」

地図を見ると、帝都はこれから向かう村からは西にある。

けれど、地図で見る限り帝都まではかなりの距離があるようだ。

「うーん……」

眉間みけんに皺しわを寄せて悩むクルミを見たおばあさんは心配そうに声を掛けた。

「どうかしたのかい？」

「あつ、いえ、路銀ろぎんもないのでどうやって帝都まで行こうかと思つて」

「ああ、なんだ、そんなこと」

クルミ的にはかなりな問題なのだが、おばあさんは朗ほがらかに笑う。

すると、老夫婦がごによごによと内緒話をして、うんうんと頷うなずき合あう。

そして、クルミに向き直ると「これは提案ていせんなんだけれど」と話し始めた。

「これから一月後、村に行商がやってくるんだ。行商はその後西の大きな町へ向かう。そこからは

帝都へ向かう乗り合い馬車があるからそれに乗ればいい。行商に連れて行ってもらえるように私達から頼んであげるよ。それまでは、私達の家で畑の手伝いなどをしてくれないかい？ そうすれば、乗り合い馬車に乗るぐらいのお駄賃だちんは払うよ。残りは帝都で仕事を探せばいい。帝都なら仕事もたくさんあるだろうからね。竜王国へ行くぐらいのお金ならすぐに貯たまるさ」

願ってもない申し出だった。

だが、あまりにクルミに都合が良すぎて疑ってしまう。

「えっ、本当にいいんですか？ 私なんて初対面の怪しい奴なのに、どうしてそこまで……」

「こんな出会いも縁だからね。人の縁は大事にしたいのさ。ちょうど娘も結婚して町に行ってしまつて老人二人で寂しく暮らしていたから、クルミちゃんが来てくれたら賑にぎやかになる。どうかな？」

なんていい人達に出会えたのだろうか。

クルミは静かに感動に打ち震えていた。

「是非ぜひ。むしろこちらからお願ひさせて下さい！」

「じゃあ、決まりだ」

「これから一月の間よろしくね」

「何でも言つて下さい。体力には自信があるので！」

「そりゃあ、頼りになる。いっぱい働いてもらおうか」

「ふふふ、あなた。調子に乗つてクルミちゃんを働かせすぎないで下さいよ。こんな可愛らしい女

の子なんだから」

「孫ができたみたいで嬉しいな、ばあさん」

「そうですね」

ニコニコと笑う老夫婦に、クルミはこんないい人達も存在するのかと驚きとともに歓喜に沸いた。
世の中捨てたものじゃないと。